

特257  
452

孫子庭出公案考

神龍果  
印



始



特 257  
452

永和九年暮春之初  
之會於山陰之蘭亭  
脩禊事也

修禊事如羣笑章  
主少在感象此地  
有崇山峻嶺交林

修竹又多清流湫  
淨暎華在右引以  
為流觴曲水所宜

一其以證其孫以著  
二之以暢其情  
三之以暢其情

是日也至其氣清  
直風和暢作觀字  
富之大俯察品狀

之來所以遊目騁  
情之可以極視聽之  
樂如其在人

之者所以備一  
式私情惟始將  
一室之內或  
因寄

尺任枚浪飛  
孰之  
外能孤香  
雜靜  
誰不固富  
一  
明於

仁遇  
替得於已  
快  
然自  
之  
不  
去  
老  
之  
由  
主  
及  
至  
所以  
之  
為

倦 係 倦  
信 之 情  
之 其 隨  
冒 向 予  
以 之 要  
為 仁 或  
陳 然 愧

終 與 正  
期 推 程  
於 况 不  
盡 修 能  
古 既 不  
人 隨 以  
言 化 之

死生之大者豈不  
痛哉每攬看人與  
成之由美命一契

未嘗不於文嗟悼  
不子歎之於惟固  
已一死生為君延



高  
執  
務  
為  
安  
征  
後  
之  
視  
六  
二  
由  
六  
之  
視  
若  
此  
在  
古  
亦  
教  
叙

時  
人  
錄  
言  
以  
述  
錄  
者  
端  
爭  
矣  
何  
以  
興  
惟  
其  
致  
一  
物  
後  
之

蘭亭叙  
永和九年  
暮春之初  
會於  
會稽  
山陰  
之  
蘭  
亭

孫過庭書 蘭亭叙解題

蘭亭叙は書聖王羲之の作である。東晉穆公の永和九年三月三日（皇紀千十三年、仁德帝四十一年に當る。）に會稽の内史である王羲之が、自分の守内の文人墨客四十一人と共に、會稽郡山陰縣の蘭亭に集つて祓禊の禮を行ひ流觴曲水の宴を張り、詩を賦して逝く春の一日を清遊した事がある。其の時、詩序として羲之自ら作り且つ書いたのが蘭亭叙である。

本帖は唐の太宗孫過庭の筆なる書譜の中から集字して蘭亭叙の全文に纏め上げたのである。

孫過庭は、字は虔禮富陽の人、官は右衛門曹參軍となつた古を好み、博雅にして文章に巧であつた。又古來能書家として書論家として有名である。特に草書に於て卓絶し用筆に巧で羲献に逼ると稱せらる。其の書に書譜草書千字文は孫過庭の代表作品である。

書譜には二通りある。一は薛紹彭本（元祐本ともいふ）今一つは、安麓村本（天津本ともいふ）である。今こゝに集字した書譜は、安麓村本にして富麗にして刻法最も鮮明筆で書いた様な用筆の妙味を見ることが出来る。この外に眞蹟本がある。眞蹟本と安麓村本とは同一筆致の本である。

永和九年、歲在癸丑。暮春之初、會於會稽山陰之蘭亭。修禊事也。群賢畢至、少長咸集。

此地有崇山峻嶺茂林修竹。又有清流激湍。映帶左右。引以為流觴曲水。

列坐其間（次）。雖無絲竹管絃之盛、一觴一咏、亦足以暢叙幽情。

是日也、天朗氣清、惠風和暢。仰觀宇宙之大、俯察品類之盛。所以遊目騁懷、足以極視聽之娛。信可樂也。

夫人之相與俯仰一世、或取諸懷抱、晤言一室之內、或因寄所託、放浪形骸之外。雖取(趣)舍萬殊、靜躁不同、當其欣於所遇、暫得於己、快然自足。曾不知老之將至。

及其所之既倦。情隨事遷。感慨係之矣。向之所欣、俛仰之間已爲陳迹。猶不能不以之興懷。况修短隨化、終期於盡。古人云、死生亦大矣。豈不痛哉。

○羣賢畢集至リ、少長咸集マール。

賢者は畢く來會し、少年も年長者も多く集つた、即ち四十一名の會合を得たのである。

○此地崇山峻嶺・茂林脩竹有リ。又清流激湍有リ左右映帶ス。引キテ以テ流觴曲水ト爲ス。

さて此の蘭亭の地は高き山、險しいみね、茂つた林、丈高き竹林があり、更に清き川の流や、早瀬もあつて、夫等が亭の左右に影を映じ、此の清流の水を引いて、曲水流觴の清遊を試みたのである。

○其次ニ列坐ス。絲竹管絃ノ盛無シト雖モ、一觴一詠、亦以テ幽情ヲ暢叙スルニ足レリ。

來會者は水邊に列び坐し、笛を吹き琴を弾するが如き賑かな會合ではないけれども、流れ來る一觴をうけ、一詩をよむは亦以て奥深い詩情を述ぶるに十分である。

每覽昔人興感之由、若合一契。未嘗不臨文嗟悼。不能喻之於懷。固知一死生爲虛誕、齊彭殤爲妄作。後之視今、亦猶今之視昔。悲夫。

故列叙時人、錄其所述。雖世殊事異、所以興懷、其致一也。後之覽者、亦將有感於斯文。

◎釋文及解義

○永和九年、歲在癸丑ニ在リ、暮春ノ初、會稽山陰ノ蘭亭ニ會ス。禊事ヲ脩ムル也。

永和九年、癸丑の年三月三日、一族及び其の當時の雅客を山陰の蘭亭に招待した。それは禊の禮を行ふが爲である。

○是日ヤ。天朗カニ氣清ク、惠風和暢ス。仰イデハ宇宙ノ大ナルヲ觀、俯ジテハ品類ノ盛ナルヲ察ル。目ヲ遊バシ懷ヲ馳スル所以、以テ視聽ノ娛ヲ極ムルニ足レリ。信ニ樂ム可ナリ。

此の日は、天氣澄み渡り、空氣は清らかで、春風はなごやかに吹いてゐる。仰いでハ天地の廣大なるさまを觀、俯しては萬類の生々たるさまを察り、己の目を遊ばしめ、胸中の懷を馳するものは、總て耳目の娛を十分に極めることが出来る。

○夫人ノ相與ニ一世ニ俯仰スルヤ、或ハ諸ヲ懷抱ニ取リテ、一室ノ内ニ悟言シ、或ハ託スル所ニ因寄シテ、形骸ノ外ニ放浪ス。

一體人間が此の世に生活するに、或る者は己が胸中に感情を抱いて、氣のよく合ふ人を一室の内で、話し合つて樂む者もあらうし、又或る者は好む所の趣味に生きて、自由放題に樂む者もあるであらう。

○趣舍萬殊ニシテ、静躁同ジカラズト雖モ、其ノ遇スル所ヲ欣ビ、暫ク己ニ得ルニ當リテハ、快然トシテ自ラ足レリトス。曾チ老ノ將ニ至ラントスルヲ知ラズ。

人の樂を得るには、種々様々で、静な事を又は躁しい事を好む者もあつて同一でない。去り乍ら、己の心ミ欲求ミが合致するを欣び、暫くの間も己の満足を得る時は、快然として満足し、老の身に至るのも知らぬのである。

○其之ク所、既ニ倦ムニ及ンデハ、情ハ事ニ随ヒテ遷リ、感慨之ニ係ル。

併しその満足も雖もやがてはあきが来るものである。かくて感情は事に随つて變化してゆき、歡樂が盡きるミ自ら感慨を起すに至るものである。

○向ノ欣ブ所ハ、俛仰ノ間ニ以テ陳跡トナレリ。猶之ヲ以テ懷ヲ興サザルコト能ハズ。

さて前に欣び樂んだ事も、一舜の間に過去ミなつて、名残を

ミだぬ事ミなる。此の理を考へるミ、殊に感慨を起さぬ譯にはゆかぬのである。

○况ヤ修短化ニ随ウテ、終ニ盡クルニ期スルヲヤ。古人云ヘリ、死生亦大ナリト。豈ニ痛マシカラズヤ。

まして人生には、長命短命の別はあるが、いつかは死ぬ時が来るのである。古人（莊子）も「死生程重大なるものはない」と言つたが、全く死に對しては痛まずには居られない。

○昔人興感ノ由ヲ攬ル毎ニ、一契ヲ合スルガ如シ。未ダ嘗テ文ニ臨ンデ嗟悼セズンバアラズ。之ヲ懷ニ喻スコト能ハズ。

古の人が感慨を興した原因を考へて見れば、丁度割符を合せた様によく合つてゐる。古人の殘した文を見る毎に悲しくなる計りで、我が心を諭して、之を鎮めるこも出来ないのである。

○固ニ死生ヲ一ニスルハ虚誕タリ、彭殤ヲ齊ウスルハ妄

作タルヲ知ル。後ノ今ヲ視ルコト、亦由ホ今ノ昔ヲ視ルガ如シ悲シイカナ。

誠に死生を同一視する説は、もミく、根據の無い言である。彭祖の如き長命者ミ短命の殤子ミを同一に視るこも妄な作りこみである。さて、後世の人が、今日の我々を視るこも亦今日の我々が昔の事を視るこも同様に感慨を抱くに相違あるまい。悲しむ可き事である。

○故ニ時人ヲ列叙シ、其述ブル所ヲ録ス。世殊リ事異ルト雖モ、懷ヲ興ス所以ハ、其致一ナリ。後ノ攬ル者、亦將ニ斯ノ文ニ感ズルコト有ラントス。

夫故、此の蘭亭に會した四十一人の名を連ね、又其の懷を述べた所の詩を書き記したのである。世が變り事が移つても、然し感慨を興す点は同一である。後世に至つて此の蘭亭記を見る者は、感慨を起すであらう。

391  
387

長樂會出版書目録

詳細目録請求ニハ必ズ三錢切手封入ノコト

御校指定の……注文品——安價引受

長樂會編	御物倭漢朗詠集	.50	6
〃	かな字基本帖(半紙判)	.10	3
〃	伊豫切朗詠集	.35	3
〃	和漢書道史年表	.20	3
〃	碑法帖百選(鑑賞研究)	.50	6
藤井惠融編著	倭漢朗詠集(半紙判)	.50	9
〃	倭漢朗詠集(普及版)	.15	3
小尾辨人編著	朗詠抄(色紙短冊・巻)	.60	6
〃法帖による	調和體練習帖	.15	3
奈良・女高師	行成かな練習帖	.17	3
大塚浩六校閲	連綿かな練習帖	.25	6
西嶋柳溪編著	細字練習帖六種(各冊)	.15	3
(法帖に臨書)	楷・行・草・かな基本・連綿・和歌		
關甲陽編著	かなのひき	.60	6
樋口尾山編著	三十六歌仙集	2.00	14
〃	手紙・葉書十二ヶ月	.40	6
〃	日用草書便覽	.35	6
〃	楷書階梯	.45	6
〃	試寫便覽	.15	3
〃	かな字鑑	.15	3
〃	年賀狀手本	.15	3
〃	暑中見舞お手本	.10	3
近衛豫樂院	和歌萬代帖	.65	6
	蒼拓逸松雲行書千文	.50	3
	元趙子昂真草千字文	.65	6
董其昌	草訣百韻歌(解説付)	.80	9
長樂會編	古法帖 蘭亭叙 楷・行・草 各冊	.25	3
◆其他 古法帖二十五錢本逐次出版す			

少額ハ郵便切手ニテ送金不苦

かな書料紙見本一揃は金三圓……

長樂會製造發賣かな書料紙(色紙短冊)

上代模様紙雪印・月印・櫻印・繼色紙・墨流し・瑞雲等の模様紙 以上何れも大判・色紙・短冊・小色紙・扇面・美濃・半紙・巻紙・等各種あり

本願寺三十六人集に使用せる模様紙  
桂宮萬葉集に使用せる模様紙・條幅用模様紙  
便箋之部—ペン毛筆兼用便箋・  
萬葉巻紙・長巻紙

製復許不

昭和十二年八月二十日印刷  
昭和十二年九月一日發行  
定價金二十五錢  
(送料三錢)

東京市小石川二丁目九番地  
吉田博光  
長樂會出版部  
東京市小石川二丁目九番地  
電話三〇〇三

東京市小石川二丁目九番地  
電話三〇〇三

東京市小石川二丁目九番地  
電話三〇〇三

終